

いな　り　ざか
稲荷坂遺跡

1999年3月

長野県飯田市教育委員会

いな り さか
稻 荷 坂 遺 跡

1999年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市座光寺地区は飯田市街地の北東部、天竜川河岸から木曽山脈前山の麓までの細長い範囲を占め、川沿いの平坦地から段丘面・扇状地等に、比較的広い耕地が広がっています。また、古来交通の要衝に位置しており、古代伊那郡衙である恒川遺跡群等の埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を残しています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のままで後世に伝えることが私たちの責務でしょう。けれども、同時に私たちはよりよい社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活の様々な場面で文化財の保護と開発という相容れない事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査を実施して記録にとどめることもやむを得ないものといえましょう。

下伊那地方事務所は、松川町から飯田市を結ぶ広域農道の新設を計画しました。工事は松川町側から着工していて、平成7年度からは飯田市座光寺地区にかかってきました。農道を建設して農業の近代化に対応することは、車が欠くことのできない交通手段であることを考えれば、必要な事業といえます。しかし、当該事業地には数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在し、稲荷坂遺跡もその一つで、工事実施によって壊されてしまうおそれがでてきました。そこで、次善の策ではありますが、工事実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになりました。

調査成果は本文で述べられているとおりありますが、調査で得られました様々な知見は、これから地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となると確信しています。

最後になりましたが、調査に当たって多大なご理解とご協力をいただいた下伊那地方事務所と隣接地の方々、現地作業及び整理作業に従事された作業協力員の皆さんほか関係各位に深く感謝を申し上げますとともに、ここに発掘調査報告書が刊行できることに対して厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例　　言

1. 本書は広域営農団地農道整備事業伊那南部2期地区工事に先立って実施された、飯田市座光寺「稲荷坂遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、下伊那地方事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成9年度に試掘調査、平成10年度に発掘調査及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施に当たり、基準点測量・航空測量・航空写真撮影・遺物写真撮影を株式会社ジャスティックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業に当たり、INRを一貫して用いた。なお、以下により遺跡の中心地番である数字を略号に続けて付した。第I地区-1871-1、第II地区-1856-1
6. 本報告書では以下の遺構番号を使用している。竪穴住居址-SB、溝址-SD、土坑-SK、その他-SX
7. 本報告書の記載順は竪穴住居址を優先した。遺構図は本文とあわせ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により山下誠一が行った。
10. 本書の執筆と編集は調査員の協議により山下誠一が行った。
11. 本書の遺構図にの中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
12. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序

例 言

I 経 過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	2
1) 調 査	2
2) 指 導	2
3) 事務局	2
II 遺跡の環境	3
1. 自然環境	3
2. 歴史環境	3
III 調査結果	9
1. 調査の方法と概要	9
2. 造構と遺物	9
1) 基本層序	9
2) 壑穴住居址	10
3) 溝 址	11
4) 土 坑	13
5) 柱穴・その他	16
6) 造構外出土遺物	16
IV まとめ	17
報告書抄録	35

挿 図 目 次

挿図 1 稲荷坂遺跡位置図	5
挿図 2 稲荷坂遺跡調査位置図及び周辺図	6
挿図 3 基準メッシュ区画及び調査位置	7
挿図 4 稲荷坂遺跡造構全体図	8
挿図 5 基本土層図	9
挿図 6 SB 01	10
挿図 7 SD 01	11
挿図 8 SD 02	12

挿図9	SD03	12
挿図10	SK01~09	14
挿図11	柱穴	15
挿図12	SX01	16
挿図13	SX02	16
挿図14	北本城々跡西外郭掘推定位図	18

図 版 目 次

第1図	SB01出土遺物	19
第2図	SD01・遺構外出土遺物	20

写 真 図 版 目 次

図版1	稻荷坂遺跡遠景（南西から） 調査地近景（北東から）	21
図版2	SB01 SB01遺物・石出土状態 SB01炉址	22
図版3	SD01（西から） SD01（東から）	23
図版4	SD01西土層面 SD01東土層面	24
図版5	SD02 SD03（西から） SD03（東から）	25
図版6	SK01 SK02 SK03	26
図版7	SK04 SK05 SK06	27
図版8	SK07 SK08 SK09	28
図版9	SX01 SX02	29
図版10	第I地区全景（北西から） 第I地区全景（北東から）	30
図版11	第II地区全景（南から） 第II地区全景（北から）	31
図版12	第I地区全景（上空から） 第I地区全景（斜め上空南西から）	32
図版13	SB01縄文土器 SB01石器 SB01石器 SB01石器	33
図版14	SD01碗 SD01石器 SD01石器 遺構外石器 SK06鋳型	34

I 経 過

1. 調査に至るまでの経過

下伊那地方事務所土地改良課は、下伊那郡松川町と飯田市を結ぶ農道の新設を計画した。飯田市としては、座光寺地区の埋蔵文化財包蔵地美女遺跡・半の木遺跡・座光寺城遺跡・座光寺中島遺跡・松林遺跡・南本城々跡に影響が及ぶことが考えられた。そこで、平成6年9月29日に、長野県教育委員会文化課・下伊那地方事務所土地改良課・飯田市教育委員会社会教育課の三者による保護協議を実施した。その結果、各遺跡とともに遺跡の状況が明らかでないので、試掘調査を実施して、本調査の可否を判断することとした。なお、試掘調査および発掘調査の日程・費用については、事業の進捗状況を見極めながら、下伊那地方事務所・飯田市教育委員会の二者で調整をしていくことが確認された。

南本城々跡の試掘調査は、半の木遺跡とともに平成9年9月29日から10月27日にかけて実施した。その結果、半の木遺跡と南本城々跡とも遺構・遺物が認められ、発掘調査が必要と判断された。そこで、遺跡範囲を確定して、協議を進めていくこととなった。なお、南本城々跡については、縄文時代の遺構等が確認され、当該地北側の稻荷坂遺跡の範囲が及んでいることが明らかとなり、南本城々跡の範囲からは外れることが判明した。そこで、発掘調査に当たっては稻荷坂遺跡の名称で実施することになった。

試掘が終了した平成9年10月から、本調査の時期と費用について下伊那地方事務所・飯田市教育委員会の二者で調整を進め、平成10年5月に発掘調査を実施することとなり、平成10年5月1日付で遺跡発掘調査の業務委託契約書を締結した。

調査が終了した段階から整理作業及び報告書刊行の日程及び費用について協議を進め、平成10年度で実施することになった。平成10年7月28日付で委託契約書を締結した。

2. 調査の経過

平成10年5月1日に重機を導入して第I地区の拡張を実施し、6日には作業員を使っての本調査を開始した。堅穴住居址・土坑・溝址等を調査して写真撮影等を済ませ、5月15日には第I地区におけるすべての作業が終了した。

市道北側に設定した第II地区の拡張は5月18日に実施し、引き続いて作業員による調査を再開した。遺構・遺物が少なく、5月25日には現場におけるすべての作業が終了した。すぐに、飯田市考古資料館において図面・写真等の基本整理を実施し、発掘調査概要報告を作成した。

整理作業は委託契約書が締結できた平成10年7月から作業を開始した。飯田考古資料館において、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業・遺物実測・写真撮影作業、第2原図の作成・トレース・版組等を行い、原稿を執筆して本発掘調査報告書を作成した。

3. 調査組織

1) 調査

調査担当者	山下 誠一					
調査員	佐々木嘉和 下平 博行	吉川 豊 伊藤 尚志	馬場 保之 西山 克己（平成10年度）	吉川 金利	福澤 好晃	
作業員	新井 幸子 金子 裕子 小平まなみ 中野 充夫 福沢トシ子	池田 幸子 唐沢古千代 齊藤 徳子 中野満里子	伊東 裕子 小島 紗子 竹村 定満 中沢 溫子	牛山きみゑ 小島 康夫 竹村 和子 橋本 宣子	岡田 直人 小林 理恵 竹本 常子 福沢 育子	
		松下 博子	柳沢 謙二	吉川 正実		

2) 指導

長野県教育委員会

3) 事務局

飯田市教育委員会博物館課

小畠伊之助（博物館課長）
小林 正春（ “ 埋蔵文化財係長）
吉川 豊（ “ 埋蔵文化係）
山下 誠一（ “ “ ）
馬場 保之（ “ “ ）
吉川 金利（ “ “ ）
福澤 好晃（ “ “ ）
下平 博行（ “ “ ）
伊藤 尚志（ “ “ ）
牧内 功（ “ 庶務係）

II 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市座光寺地区は市街地の北東4kmにあり、北東を下伊那郡高森町、南東は天竜川を挟んで同喬木村、南西を飯田市上郷と接しており、飯田市の北端部に位置している。

飯田市は赤石山脈と木曾山脈にはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘がみられるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

座光寺地区の場合、断層運動でつくられた段丘で大きく上段と下段に分けられる。上段は木曾山脈の山裾部から大規模な扇状地が発達し、扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水等微地形の変化が著しい。特に地区を区画する北側の南大島川、南側の土曾川・堀ヶ洞川による扇状地の形成、開析谷の浸食は著しい。下段は数段の小段丘からなり、恒川遺跡群が立地する上位の段丘面の場合、北側は南大島川から扇状地が発達するのに対し、南側は比較的段丘面がよく残る等複雑な微地形を呈する。

稲荷坂遺跡は飯田市座光寺地区の中央部に所在する。大規模な扇状地が発達する上段の北東部に位置し、地形的には扇端部にあたる。当該地は南東側に緩い傾斜をもちながら比較的広い平坦面が広がっており、果樹園などに利用されている。

微地形をみると、南側は西の沢川の浸食による谷が北西から南東方向に続いており、その谷を挟んだ南側には座光寺中島遺跡がある。北側は段丘面を南大島川が浸食した高低差30m程の崖となっている。稲荷坂遺跡の範囲でいえば、調査地点は南東端部にあたる。

2. 歴史環境

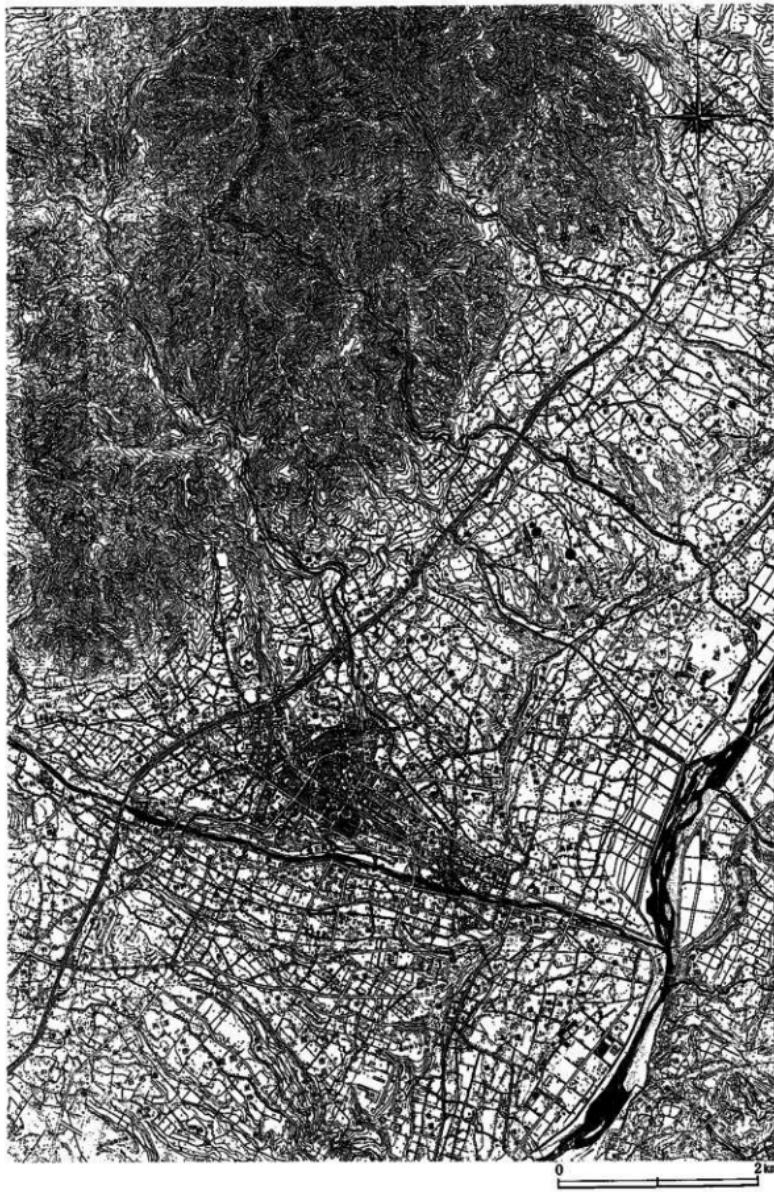
座光寺地区は土器・石器等の遺物や古墳の多いことで古くから知られており、埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。こうした文化財に表われた先人達の活動の証左は旧石器時代末までさかのぼる。前述の自然環境で概観した地形的特徴が当地区的遺跡立地に大きく関わっており、上段・下段で遺跡の分布や性格が異なっている。また、発掘調査された遺跡が多く、全時代にわたって具体的な様相を描くことができる。

上段は縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く、とくに山麓部には縄文時代の遺跡が集中し、鳥居龍藏の調査で知られた大門原遺跡等がある。東面した緩傾斜の扇状地扇央部分にあたり、大規模な集落址の存在がうかがえる。平成8年度に農道改良に伴い発掘調査が実施されており、縄文時代中期中葉から後葉の伊那谷有数の大集落が広がっていることが確認されつつある。扇端から上段の段丘崖にかけては弥生時代後期の遺跡が分布する。高燥な台地上に生産基盤を求めた該期に共通する現象であり、具体的には人口増と生産手段の発達が背景と考えられる。昭和37年、前年の梅雨前線による

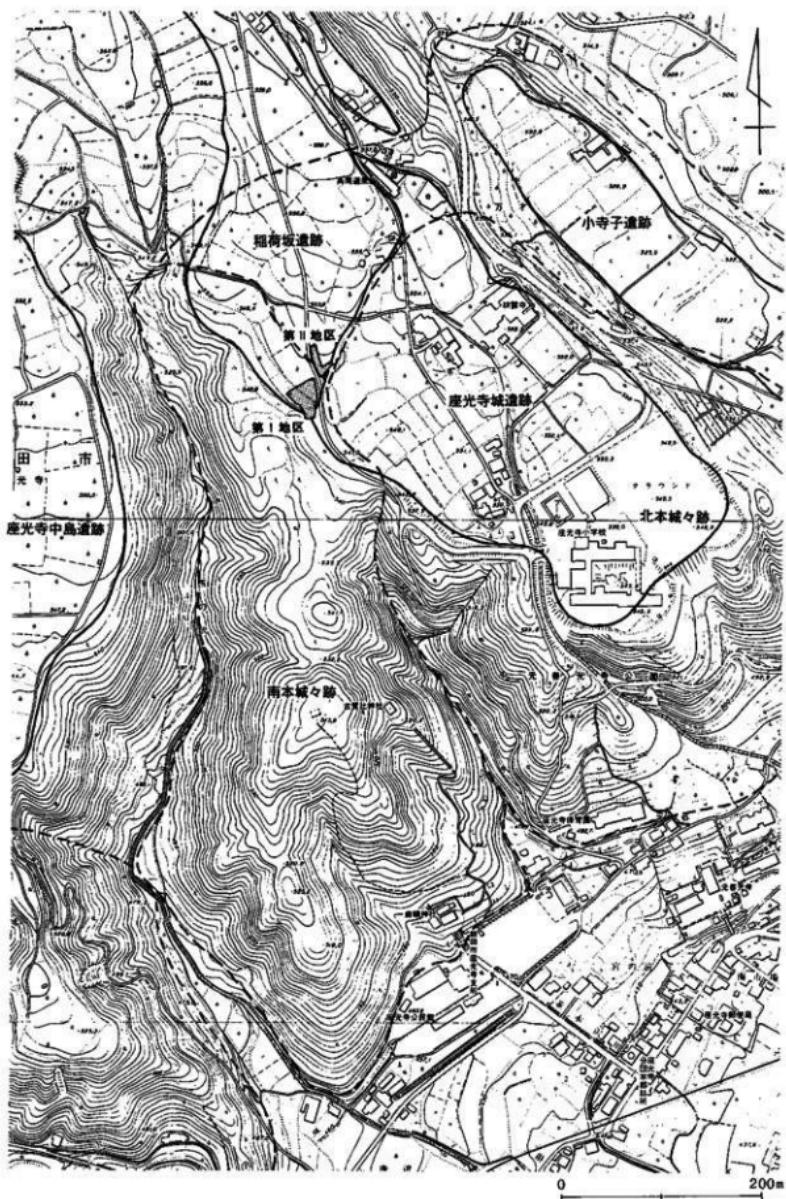
集中豪雨（36災）の災害復旧工事用採土のため調査された弥生時代後期前半の座光寺原遺跡（今村1967）、昭和50年農業構造改善事業に伴ない道路部分が調査された弥生時代後期後半の中島遺跡（座光寺考古学研究会1976）等該期の典型的な集落があるといえる。中島遺跡は平成8・9年度に広域農道新設に先立ちその南部が発掘調査され、集落の広がりを把握することができた。段丘崖上部には北本城古墳をはじめとする古墳および中世の山城2つがある。後者は北本城と南本城であり、小河川に開析された複雑な地形を生かしている。

下段地帯は縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、時代毎占地した地点を若干異にしている。縄文時代の集落は主に南大島川から発達した扇状地に立地する。縄文時代中期を除く他時期は遺物が中心で集落の実態は明確でないが、資料が十分でない各期にあって比較的良好な資料を提示している。中期は座光寺バイパス路線内の新井原遺跡で後葉の大規模な集落の一部が調査されている（飯田市教育委員会1986）。弥生時代中期から古墳時代前期にかけては弥生時代後期に一時的に拡大するものの基本的に南大島川の扇状地上に位置し、古墳時代後期から平安時代の集落は扇状地および南側の段丘面に拡大する。一方、古墳の分布は該期集落の外縁の、高岡1号古墳を中心とする北部の扇状地扇頂付近および遺跡群東側の段丘崖上にみられる（飯田市教育委員会1986）。これまで調査された古墳は新井原12号古墳・新井原古墳群・畦地1号古墳・高岡3号古墳・高岡4号古墳（飯田市教育委員会1990）・ナギジリ1号古墳（飯田市教育委員会1998）等があり、現在までに調査されずに消滅した古墳は数多くに上る。

昭和51年度から実施された一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ恒川遺跡群発掘調査の結果、大型掘立柱建物址群や硯・鉄鉢・和同開珎銀鏡等の官衙的遺構・遺物が多数発見されている（飯田市教育委員会1986）。そして、昭和57年度から飯田市教育委員会が継続実施している範囲確認調査の中で、古代「伊那郡衙」が追究されてきた。その結果、平成6年度の調査で正倉となる大型の掘立柱建物址が調査され、なお郡衙の中心部は不明であるものの、具体的な地点をあげて推定される段階に至った。同時に遺跡群内の各地点が果たした役割が遺構分布状況から描出されてきている。また、バイパス周辺の諸開発に先立つ緊急調査の結果、田中・倉垣外地籍・新屋敷地籍周辺の遺構分布が明らかにされつつある（飯田市教育委員会1988・1991A・1991B）。



挿図1 稲荷坂遺跡位置図



挿図2 稲荷坂遺跡調査位置図及び周辺図

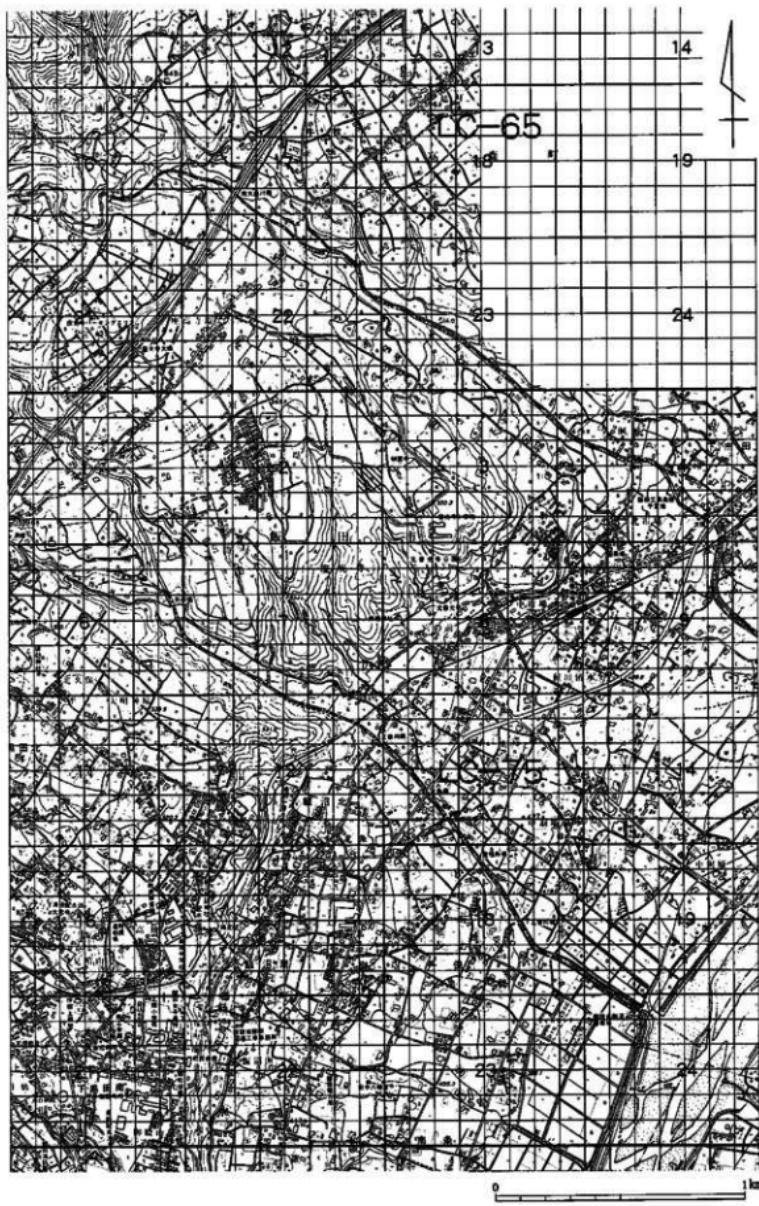
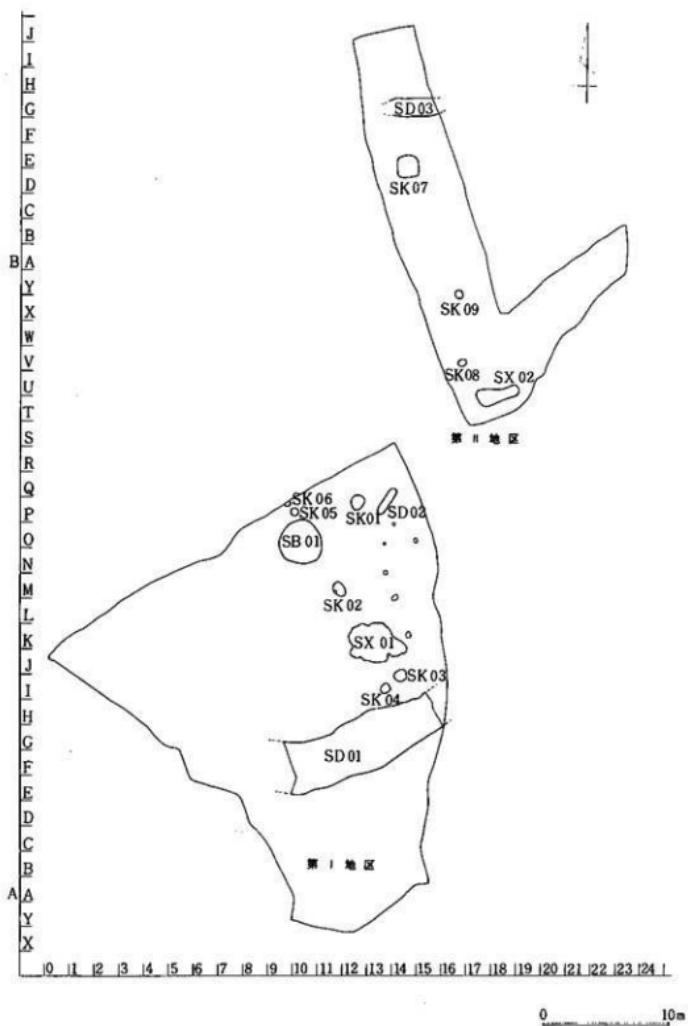


図3 基準メッシュ区画及び調査位置



插図4 稲荷坂遺跡遺構全体図

III 調査結果

1. 調査の方法と概要

調査区は遺跡内を通過する市道によって2箇所に分かれた。よって、それぞれにⅠ・Ⅱのローマ数字を付して調査にあたることとした。なお、第Ⅰ地区は1871-1地番、第Ⅱ地区は1856-1地番を中心となる。

測量用の基準杭設置は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、(株) ジャステックに委託して実施した。なお、基準メッシュ図の区画については『三尋石遺跡 三尋石(II) 遺跡』(飯田市教育委員会1996) に詳しく記述されているので、そちらを参照していただきたい。本調査地の区画は挿図3で示したようにLC75-2-31である。

今次調査で検出された遺構は以下のとおりである。

豎穴住居址 1軒
溝 址 3本
土 坑 9基
柱 穴 7
そ の 他 2基

2. 遺構と遺物

1) 基本層序

第Ⅰ地区SK06の西側、用地外との北西に面する壁面

の層序を挿図4で示した。

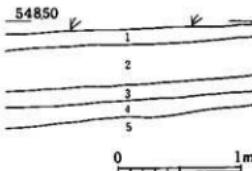
1層：暗褐色(10YR3/3 SL)、耕土

2層：褐色(7.5YR4/4 L)

3層：褐色(7.5YR4/3 L)

4層：褐色(7.5YR4/6 L)

5層：にぶい黄褐色(10YR5/4 L)、基盤



挿図5 基本土層図

遺構検出面は基盤の5層上面で、比較的容易に検出できた。

第Ⅱ地区の層序は基本的な変化はないが、表面から基盤まで
が浅いため2・3層がなくして、1・4・5層で構成され、4層
がない箇所も認められる。

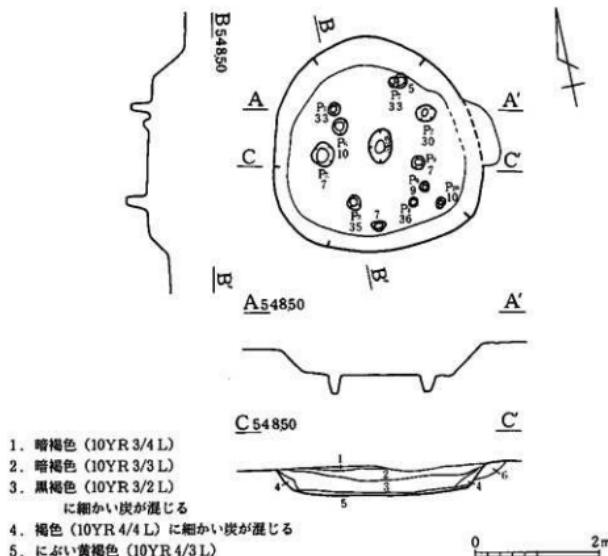
2) 穴住居址

① SB 01 (挿図6・第1図・図版2・13)

遺構 第I地区AO10を中心にして検出し、全体を調査した。4.4×3.4mの不整円形の穴住居址である。壁高は49~32cmを測り、緩やかな壁面をなす。東壁面の一部は覆土と壁面の見極めが難しく、掘りすぎてしまった部分がある。床面は中央部がわずかに窪み、堅く良好である。主柱穴はP1~P4で、その他の穴で役割が特定できたものはない。炉址は床面ほぼ中央部にある地床炉で、床面を50×36cmの梢円形で深さ9cmに掘り窪め、東壁面にわずかに焼土が認められた。土層は自然埋没した状況を示し、遺物や20~10cmの石が床面から15cm前後上の覆土中から出土した。

遺物 土器・石器があり、覆土中から特別の集中箇所はない状態で出土した。縄文土器は三角陰刻文をもつ口縁部片(1-1~3)と竹管文が施される個体(1-4~9)があり、器面の荒れなどのため文様の確認できない破片が66点ある。石器は、打製石斧(1-10)・横刃型石器(1-11~13)・敲打器(1-14)・両極石器(1-16)・微細剥離痕のある剥片(1-15・17)がある。使用痕のない黒曜石の剥片が多く、図示しなかったが26点がある。

出土遺物より縄文時代前期末葉から中期初頭に位置づけられる。

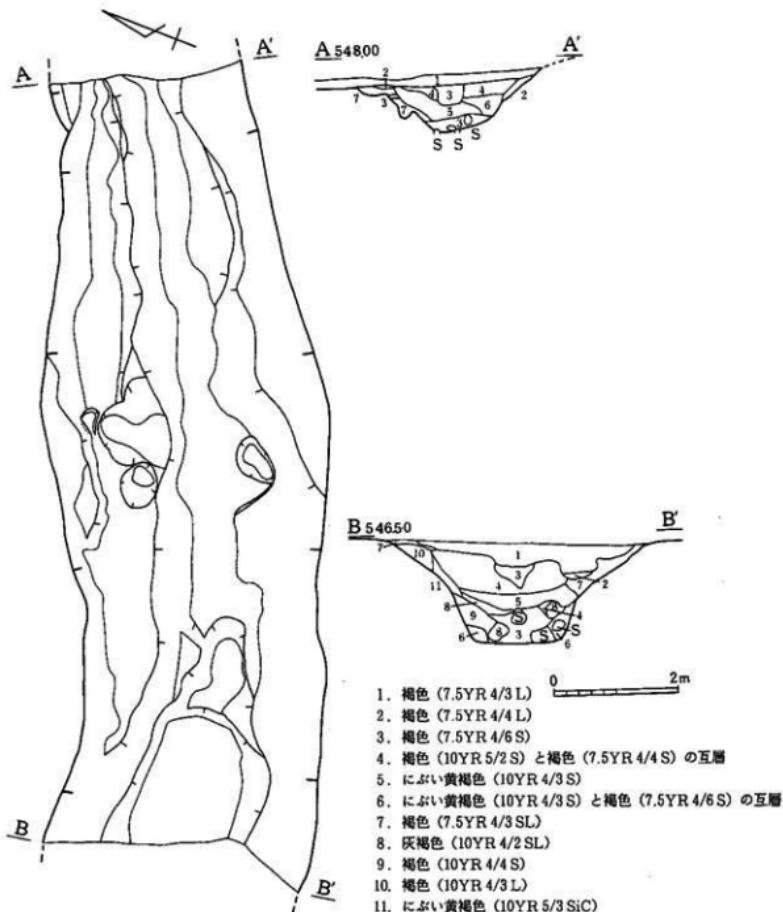


挿図6 SB 01

3) 溝 址

① SD 01 (挿図7・第2図・図版3・4・14)

遺構 第I地区 A E10～AH15にかけて検出し、両側に延長する。調査延長は12.3mで、幅4.3～1.9m・深さ191～43cmを測る。調査範囲での方向はN71°Eを示す。断面形は基本的に逆台形をなすが、水流で抉られて深くなったりする箇所が認められる。西側壁面は途中で段をもつが、土層観察により水が流れたことによると考えられる。土層は北側と南側を示したが、底面付近の大半に砂が堆積しており、水が流れたことを示している。



挿図7 SD 01

遺物 土器・石器がある。土器は陶磁器類で、図示できるのは瀬戸美濃新業焼の青磁碗（2-1）・瀬戸美濃本業焼の浅形鉢（2-2）がある。石器は、すべて周辺からの流れ込み遺物と考えられ、打製石斧（2-3～7）・横刃型石器（2-8）・黒曜石片1点がある。土器片には、摩滅の著しい繩文土器3点・近世陶磁器片13点・平瓦片5点がある。

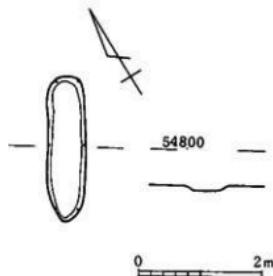
遺構の性格であるが、北本城々跡の西端を画する堀である。第I地区の一部の調査にとどまってしまったが、西側の窪地や東側の台地に続いており、工事対象地区にも連続していただけに悔やまれる結果となった。

② SD 02 (挿図8・図版5)

遺構 第I地区 A P13・A Q13で検出し、全体を調査した。調査延長は2.2mで、幅60cm前後・深さ9～6cmを測り、方向はN35°Eを示す。断面形は逆台形で、土層は暗褐色（10YR3/4 L）の一層である。

出土遺物はない。

出土遺物がなく確定した時期を示すことは不可能である。



挿図8 SD 02

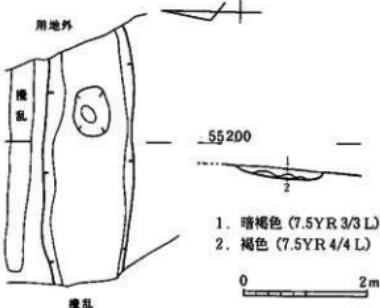
③ SD 03 (挿図9・図版5)

遺構 第II地区 B H13～B H15で検出し、東側に延長し、西側では攪乱に切られてその先では確認されなかった。調査延長は3.8mで、幅1.4～1.2m・深さ21～16cmを測り、方向はN85°Eを示す。断面形は逆台形で、土層は暗褐色（7.5YR3/3 L）が主体をなし、底面付近に褐色（7.5YR4/4 L）が認められる。

東底面に80×60cmの楕円形で深さ20cmを測る穴があり、本址との関係は不明である。

出土遺物はない。

出土遺物がなく確定した時期を示すこと不可能である。



挿図9 SD 03

4) 土 坑

① SK01 (挿図10・図版6)

遺構 第I地区AP12で検出し、全体を調査した。108×102cmの不整円形を呈し、深さ37cmを測る。土層は自然埋没の状況を示し、断面形は楕状をなす。

遺物 チャートの剥片1点がある。

② SK02 (挿図10・図版6)

遺構 第I地区AL11・12で検出し、全体を調査した。柱穴に切られる。116×88cmの楕円形を呈し、深さ19cmを測る。土層は褐色(7.5YR4/4L)で、断面形は浅い楕形をなす。

出土遺物はない。

③ SK03 (挿図10・図版6)

遺構 第I地区AI・J15で検出し、全体を調査した。100×88cmの丸みを帯びた長方形を呈し、深さ31cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形をなす。

出土遺物はない。

④ SK04 (挿図10・図版7)

遺構 第I地区AI14で検出し、全体を調査した。80×70cmの丸みを帯びた長方形を呈し、深さ15cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形をなす。

出土遺物はない。

⑤ SK05 (挿図10・図版7)

遺構 第I地区AP9・10で検出し、全体を調査した。58×52cmの楕円形を呈し、深さ27cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形をなす。土坑掘り方の北西脇にわずかに焼土が認められた。

遺物 金属器の鋳型と考えられる大小7個の粘土塊が出土し、同一個体と考えられる。

⑥ SK06 (挿図10・図版7)

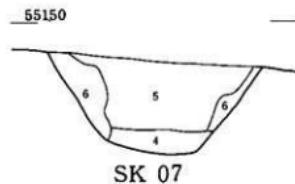
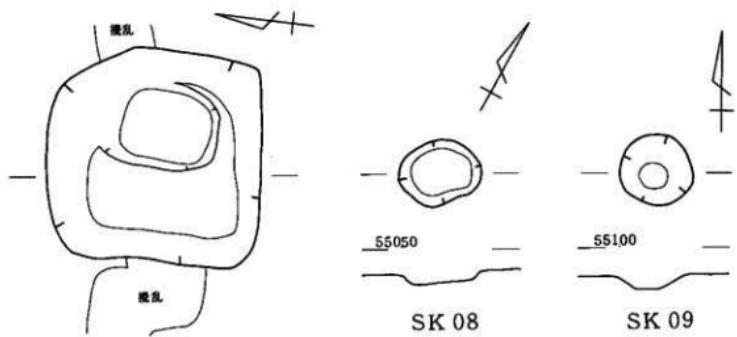
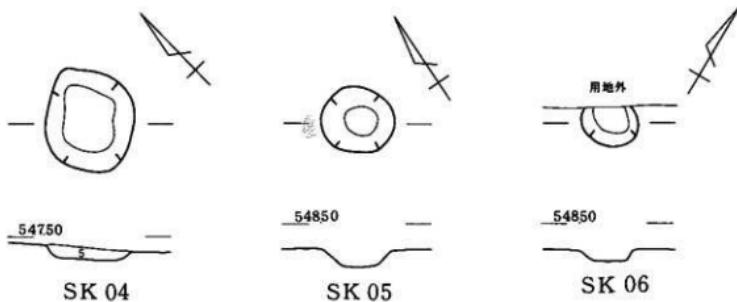
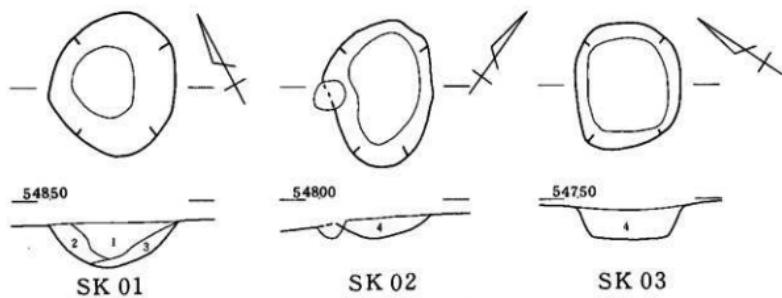
遺構 第I地区AP9で検出し、北西側が用地外で全体の1/3程を調査した。南西・北東方向の長さが48cmの楕円形を呈し、深さ17cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形をなす。

出土遺物はない。

⑦ SK07 (挿図10・図版8)

遺構 第II地区BD・E14で検出し、全体を調査した。172×168cmの丸みを帯びた方形を呈し、深さ67cmを測る。底面の東半分は96×68cmの長方形を呈し底面からの深さ54cmを測る穴がある。2層上面に床面状のたたきを認め、底面の穴はたたきを除去して検出した。

遺物 石英片が出土したが、使用痕は認められない。



1. 暗褐色 (10YR 3/4 L)
2. にぼい黄褐色 (10YR 4/3 L)
3. 褐色 (10YR 4/4 L)
4. 褐色 (7.5YR 4/4 L)
5. 褐色 (7.5YR 4/3 L)
6. 褐色 (7.5YR 4/6 L)

0 1m

摺図10 SK 01~09

⑧ SK 08 (挿図10・図版8)

遺構 第II地区 A V18で検出し、全体を調査した。68×48cmの椭円形を呈し、深さ18cmを測る。

底面は南西側にわずかに傾斜し、断面形は逆台形をなす。

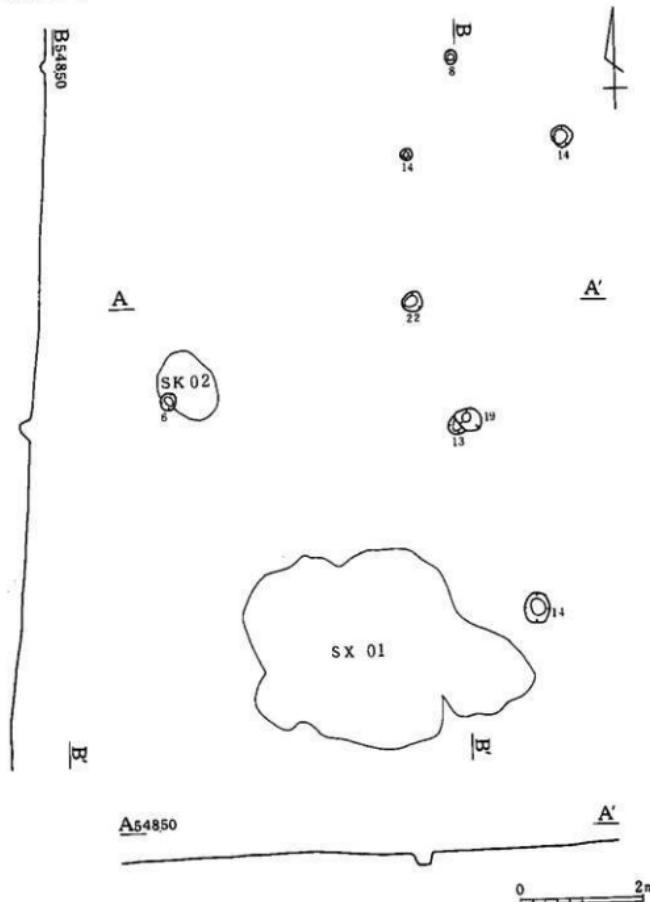
出土遺物はない。

⑨ SK 09 (挿図10・図版8)

遺構 第II地区 A X・Y16で検出し、全体を調査した。直形48cmの円形を呈し、深さ21cmを測る。

底面は平坦で、断面形は浅い逆台形をなす。

出土遺物はない。



挿図11 柱 穴

5) 柱穴・その他

① 柱穴（挿図11）

遺構 柱穴は少なく、第I地区のSX01からSD02の間に7本があるのみである。そのうちSX01に近い4本は2×1間の掘立柱建物址として把握できる可能性を指摘しておく。柱穴内から遺物は出土しなかった。

② SX01（挿図12・図版9）

遺構 第I地区AK12を中心にして検出し、全体を調査した。4.8×3.2mの不整形を呈する。底面の形状から4箇所に浅い土坑状の落ち込みが認められるが、土層からは切り合い関係は認められなかったので、同一遺構と考えられる。壁面はきわめて緩やかな立ち上がりをなし、底面は軟らかかった。主体となる土は基本土層1層に類似する。

出土遺物はない。

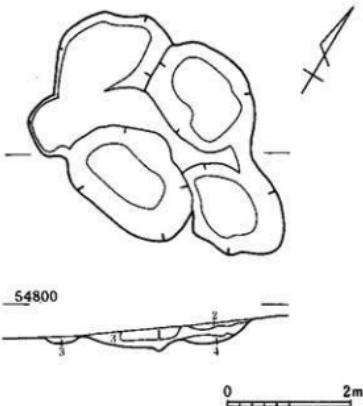
時期の確定する決め手はないが、主体となる土が基本土層1層の耕土に類似する土が主体であることを考慮すれば、耕作の擾乱とは性格が異なるが、近代に位置づく。

③ SX02（挿図13・図版9）

遺構 第II地区AU18を中心にして検出し、全体を調査した。3.3×0.9mの丸みを帯びた長方形を呈する。北西側に176×80cmで深さ底面から35cmを測る穴、東隅に直径68cmで底面からの深さが18cmを測る穴がある。壁高は5cm前後を測り、緩やかな壁面をなす。

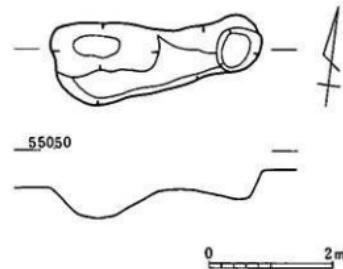
出土遺物はない。

時期・性格とも不明であるが、全体の様相から近世以降と考えられる。



1. 褐色 (10YR 4/6 S-L) に暗褐色 (10YR 3/2 L) が混じる
2. ないし 黄褐色 (10YR 4/3 S-L)
3. 暗褐色 (10YR 3/2 L) に褐色 (10YR 4/6 L) が混じる
4. 褐色 (10YR 4/6 L) に黄褐色 (10YR 5/6 S-L) が混じる

挿図12 SX01



挿図13 SX02

6) 遺構外出土遺物

遺構に直接結びつかない遺物はきわめて少なく、第I地区の打製石斧2点（2-9・10）を図示した。他に、第I地区に近世陶器片1点、第II地区に黒曜石片3点がある。

IV まとめ

今次調査で出土した遺構・遺物についてはすでに述べたとおりである。時間等の制約により、十分な説明や検討が加えられていないのは遺憾である。ここでは調査で得られた成果・課題を指摘してまとめてみたい。

縄文時代では、縄文時代中期初頭に位置づく竪穴住居址が1軒調査された。該期の遺構は調査例が徐々に増加しており、その様相が分かるようになってきている。そうした中で、竪穴住居址がある程度まとまるいわば集落としての発見される例は少なく、竪穴住居址が単独で検出されることが多い。今次調査地は遺跡の南東端部と考えられ、北西には遺跡の中心地域が広がっていることが想定される。該期の竪穴住居址についても、調査した1軒のみとは断定できないが、大規模な集落は想定しにくい。過去の調査例と同様に単独もしくは数軒程度の集落を想定しておく。

中世では、北本城々跡の西側を画する堀が確認された。座光寺地区には中世城跡として北本城々跡・南本城々跡が上段と下段を画する段丘の突端に小さな沢を挟んで隣接しており、浅間砦跡がその南に位置する。北本城々跡は座光寺小学校建設に先立ちその中心部の発掘調査が実施されている。南本城々跡については、発掘調査などによりその実体は明らかとなっていないが、保存状態の良い中世城郭として県史跡指定の候補ともなっている。

調査前には、今次調査地は北本城々跡の西端部、南本城々跡の北端部と把握されていた。南本城々跡については、その北外郭部分としての具体的な遺構の把握も期待されたが、北本城々跡について調査前の時点では、あまり考えられていなかったことも事実である。結果的には、北本城々跡の西端を区画する堀が把握できたことになり、その範囲を確定することができた。調査は一部にとどまってしまったが、調査地北側の地形をみると、堀の痕跡と考えられる溝状の窪地が確認された。何箇所かでほぼ直角に曲がりながら、おおよそ北西方向に連続し、段丘地形を画する南大島川の浸食による崖まで続いている。挿図14でその推定線を示しておいた。堀の東側部分についても、路線部分については試掘調査を実施し、遺構・遺物は認められなかった。城郭の中心からは離れている部分でもあり、遺構のない箇所に路線が設定されたものといえる。

南本城々跡については、遺構・遺物は確認されなかった。調査地南側の窪地について、郭の一部との把握もあったが、試掘調査により水田の造成によるものと判明した。当該地まで城郭の範囲は及んでないものといえる。

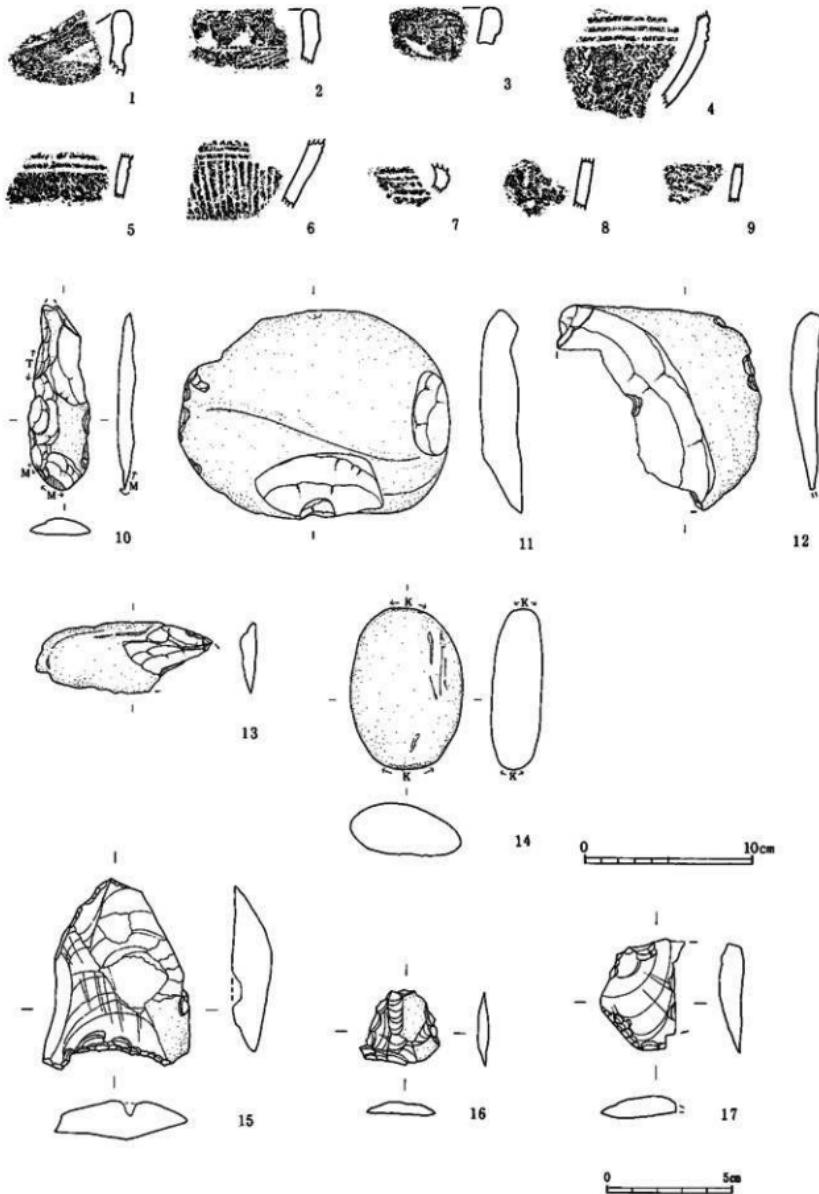
稲荷坂遺跡の調査で得られた問題点のいくつかを整理した。調査地の状況について十分に把握できたもののかははだ心許ないが、今後の遺跡保護活動に生かしていく所存である。近世陶器については長野県埋蔵文化財センター市川隆之氏にご指導をいただいた。終わるに当たって記して、お礼を申し上げます。

引用・参考文献

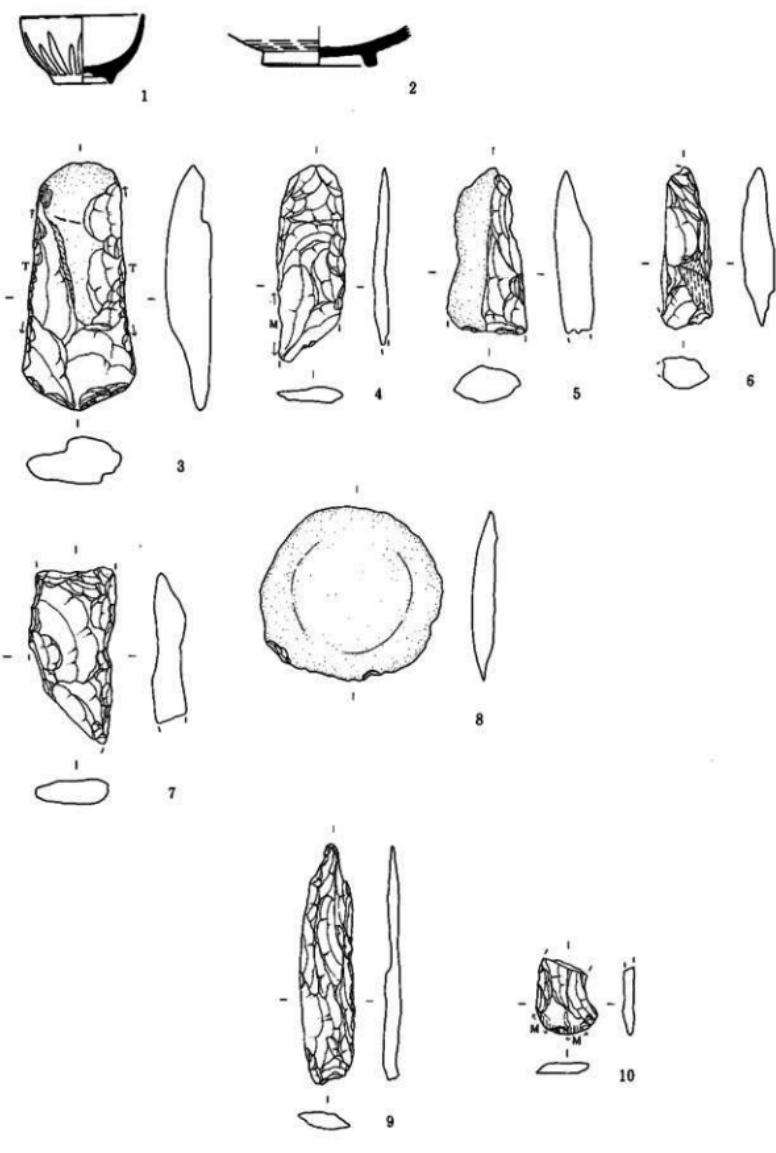
- | | | |
|-----------|-------|-----------------------------|
| 飯田市教育委員会 | 1986 | 『恒川遺跡群』 |
| 飯田市教育委員会 | 1988 | 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』 |
| 飯田市教育委員会 | 1990 | 『高岡遺跡 一高岡3・4号古墳』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991A | 『恒川遺跡群 新屋敷遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991B | 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』 |
| 飯田市教育委員会 | 1996 | 『三尋石遺跡 三尋石(II)遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1998 | 『ナギジリ一号古墳』 |
| 今村善興 | 1967 | 『飯田市座光寺原遺跡』『長野県考古学会誌』4号 |
| 座光寺考古学研究会 | 1976 | 『飯田市座光寺中島遺跡の調査報告』『伊那』第24巻3号 |



插図14 北本城々跡西外郭堀推定位図



第1図 SB01出土遺物



第2図 SD01 (1~8)・遺構外 (9・10) 出土遺物

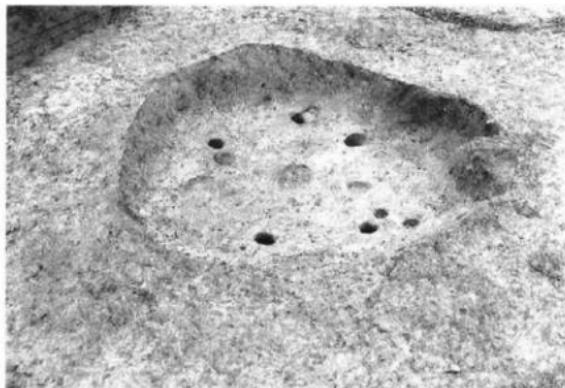


福荷坂遺跡遠景（南西から）



調査地近景（北東から）

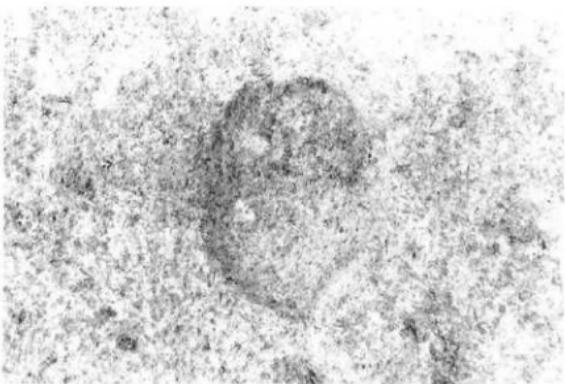
図版 2



S B 0 1



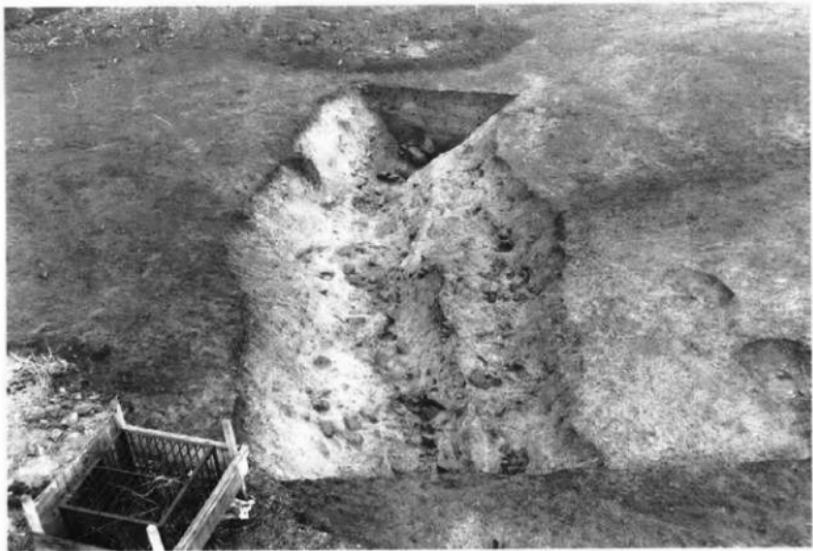
S B 0 1 遺物・石出土状態



S B 0 1 炉址



S D 0 1 (西から)



S D 0 1 (東から)

図版 4



SD01 西土層面



SD01 東土層面



S D 0 2



S D 0 3 (西から)



S D 0 3 (東から)

図版 6



SK 01



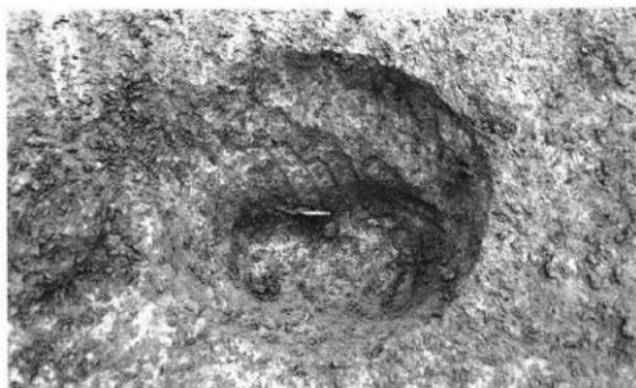
SK 02



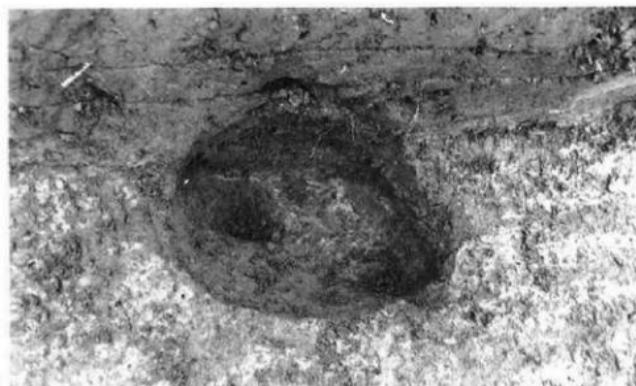
SK 03



SK 04



SK 05

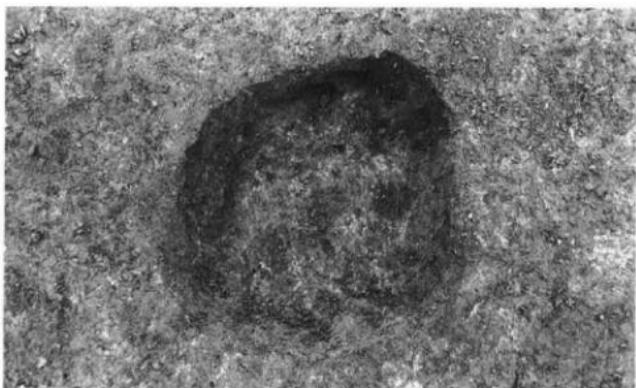


SK 06

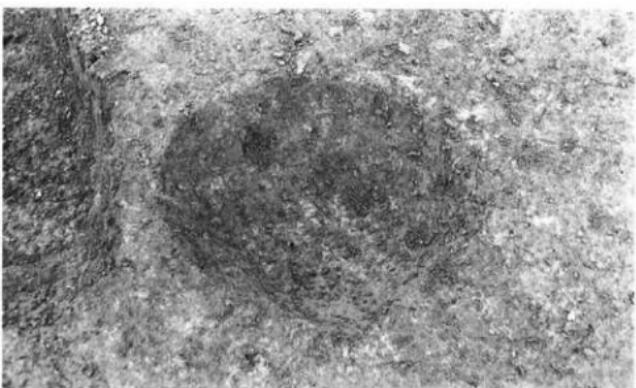
図版 8



SK 07



SK 08



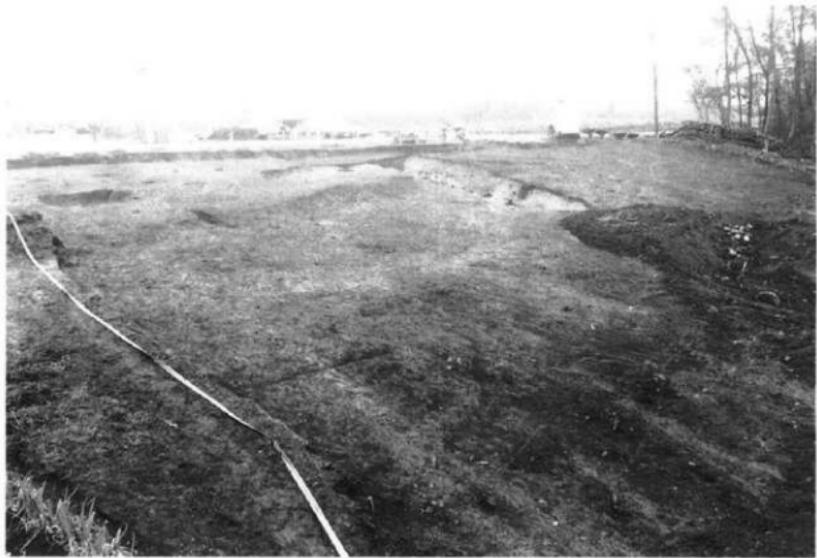
SK 09



SX01



SX02



第 I 地区全 景 (北西から)



第 I 地区全 景 (北東から)



第 II 地区全景（南から）

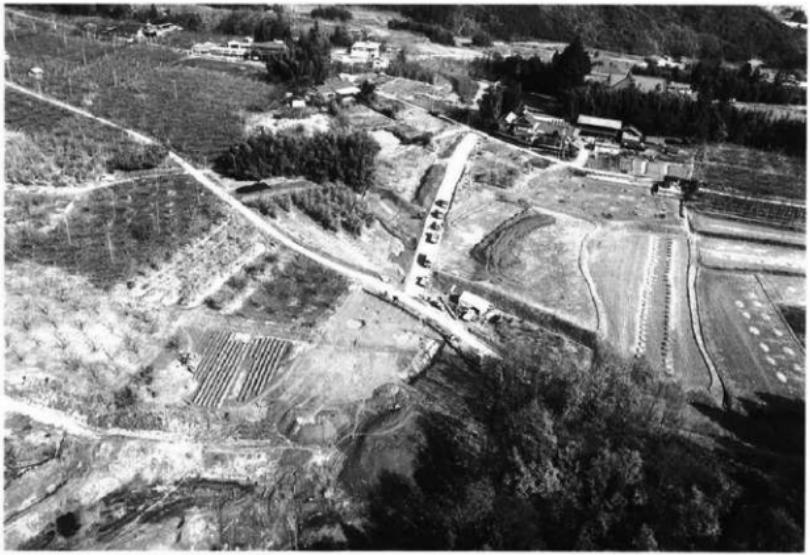


第 II 地区全景（北から）

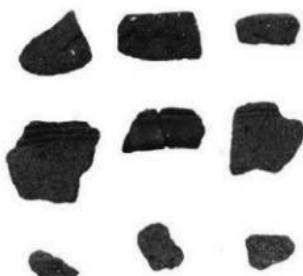
図版 12



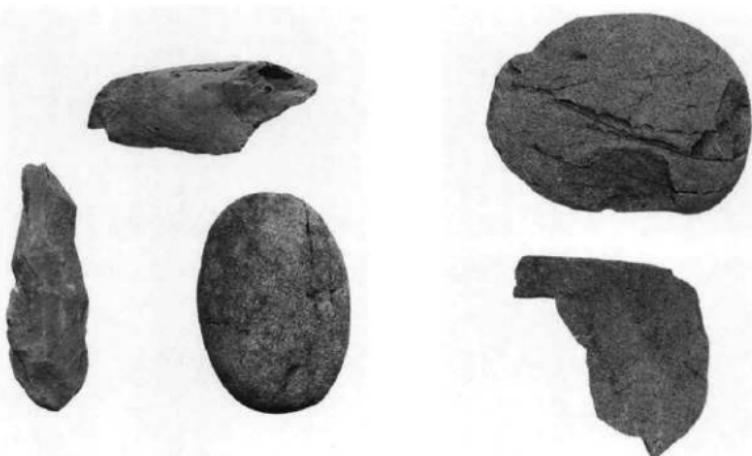
第Ⅰ地区全景(上空から)



第Ⅰ地区全景(斜め上空南西から)



SB01 純文土器



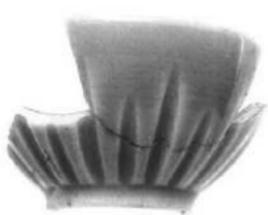
SB01 石器

SB01 石器



SB01 石器

圖版 14



SD 01 碗



SD 01 石器



SD 01 石器

遺構外石器



SK 06 鋳型

報告書抄録

	いなりざか							
書名	稲荷坂							
副書名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山下誠一							
編集機関	飯田市教育委員会							
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL 0265-53-4545							
発行年月日	西暦1999年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
稲荷坂	長野県 飯田市 座光寺	市町村	遺跡番号	35度 32分 07秒	137度 51分 19秒	19980501 ～ 19980525	853m ²	広域営農団地農道整備事業伊那南部2期地区
稲荷坂	集落址 城郭	縄文時代 中世	竪穴住居址 溝址	1軒 1本	縄文土器・石器 近世陶磁器	縄文時代中期初頭の竪穴住居址を調査した。 北本城々跡の西側を画する堀と考えられる溝を検出した。		

稻荷坂遺跡

1999年3月19日 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地
飯田市教育委員会
印刷 有限会社 発光堂
